

令和7年度 第2回宇和島市発達支援連絡会 会議概要

【開催日時】

令和8年3月6日（金） 13:30～15:00 ※対面で開催

【開催場所】

宇和島市発達支援センター 研修室

【出席者】

委員 13名（2名欠席）

アドバイザー 1名

事務局 5名

【内容】

委員及び事務局挨拶・アドバイザー紹介

議事 （1）発達支援連絡会ワーキング部会の取り組みについて

（2）地域全体の支援体制について

（3）他機関での連携に関する取り組み・情報提供

【会議経過】

1 開会

事務局より配布資料確認

協議内容の公開について

2 主催者あいさつ（福祉課長）

3 議事 進行：委員長

（1）発達支援連絡会ワーキング部会の取り組みについて

「令和7年度 第2回宇和島市発達支援連絡会事前配布資料Ⅰ（スライド番号Ⅰ-14）」にそ
って、発達支援連絡会ワーキング部会の取り組みについて事務局より説明

①ワーキング部会参加委員より

委員：保育協議会は4つの部会で構成され、発達支援においては療育部会での研修が中心であった。しかし実践に生かせていないことが課題だったため、今年度からグループワーク等を取り入れ、現場の困り感を共有しながら改善を図っている。他の部会では例年通りの研修が続き、保育協議会全体の方向性の一致には至っていない。ワーキング部会を通じて課題がより明確になった今、保育協議会で悩みを相談し合い、課題解決の方向性を共有する場としても機能させていきたい。来年度は「支援が必要なこどもの育ちを止めない」を共通テーマに、各部会が困りごとやできることを見える化し、まずは手探りでも具体的な行動を起こし、組織として支援体制の構築を目指す。

委員：ワーキング部会でのアンケートを通じ、同じ方向性へ向かうこと、そのために園内での情報共有のあり方を構築・改善していくことや、研修計画や実施内容をどのように

共有すべきか具体的な検討を進めていく必要があるという課題が出た。まずは来月、幼稚園教諭が集まる場にて各園の情報や計画を共有する。

委員：新任期職員が多い中で、職員のスキルアップや保護者視点での寄り添い方を養うこと、さらに親子を支えるための関係機関との連携が重要。園の先生方とともに研修会を実施し、顔の見える関係性を築くことが親子支援の基盤となり、連携の第一歩になると思う。

②質問等

委員：発達障がい児者親の会こころ根っこ・ゆうきの会の座談会にて、参加者間のこどもの年齢差が15歳ほどあったが、早期対応時に感じるものがほとんど変わっていないことに驚いた。一方で、ワーキング部会の報告を通じて意識が変わりつつあることを知り、嬉しく思うと同時に、不安を抱える保護者がまだ多くいるため、うまく進んでいってほしいと期待する。保護者は情報や道しるべがなく、孤立感を感じることも多い。具体的な情報や支援を伝えてもらいながら、保護者ひとりが抱え込むことのないようにバックアップしていただきたい。

委員長：引継ぎ後の支援の課題、ここでとどまらないことが挙げられているが、医療現場に対する質問や要望はないだろうか。気軽に相談に来てもらいたい。

(2) 地域全体の支援体制の取り組みについて

「令和7年度 第2回宇和島市発達支援連絡会事前配布資料Ⅰ(スライド番号15-26)にそって、地域全体の支援体制の取り組みと今年度のワーキング部会の取り組みについて事務局より説明。

①質問等

委員：連携はまず「つながる」ことから始まり、そのつながりを強めていくことから築かれるものだと考えている。普段の支援では、つながりを大切にし、関係者と助け合うことや気軽に話し合える関係性をつくるよう心がけている。また、連携の目的やゴール(方向性)が明確で、関係機関全体でそれを共有できているときこそ、より良い連携がとれていると感じる。

委員：支援者の立場や環境の違いにより本人の見え方が異なる事がある。その違いが調整された上で共通理解をはかれることがとても大きなこと。それができる発達支援センターの存在は心強く、関わり方のズレや溝をなくすことにつながると思う。本人の情報や支援者の支援を俯瞰的に整理するセンターの活用が重層的な支援体制の構築に寄与すると感じている。また、自分自身の取り組みを振り返る機会にもなった。各機関の役割を認識し、支援を振り返りながら不安を語り合い、思ったことを機関同士相談できる体制や関係性を広げていきたい。

アドバイザー：巡回相談開始から5年が経ち、訪問を通じて課題とその解決策について検討してきた。今年度はワーキング部会に参加し、15年前と状況が大きく変わっていないものの、着実に前進している部分もあると感じた。一方で、「医学モデル」的な考え方が根強く、保護者が不安を感じる原因となっている現状もある。支援者が「社会モデル」の視点に立っているかが重要。「つなぐ」時点でも「医学モデル」の視点で見えないか、これをふまえ保護者と寄り添う姿勢を大切に信頼関係を築くことが子どもを支える鍵となる。支援者自身の考え方の違い、ここに現状課題があると感じている。

保護者の受容は簡単にいかないプロセスに寄り添い、同じ方向を向いて伴走するこ

とこそ私たち支援者の役割。「できないこと」ではなく、こどもの可能性や成長に目を向けること、環境調整や具体的な支援を行いながら見守る姿勢が大切。また、「様子を見る」という曖昧さが保護者の不安や焦りを招き、親子関係の悪化へつながる場合もあるため、育ちの段階をふまえ観察のポイントや意味、次のステップ（見通し）を具体的に伝えていくことが必要。関係機関へつないだ後の連携が十分でない現状で、各機関同士が互いに情報発信及び共有を行い、自身の役割を認識し発揮し合う、「という真の連携がとれる支援体制を構築していく必要がある。これらの取り組みを進めることで、「共に育つ、共に生きる社会」の実現を目指し、宇和島が安心して暮らせる社会になるための一歩となるよう願っている。

（3）他機関での連携に関する取り組み・情報提供

①特別支援連携協議会の取り組みについて

平成22年より実施しており、小中学校や就学前施設、その他関係機関の方に参加していただいている。今年度は「つながりを強化する」をテーマに教育支援計画の引継ぎや中高連携、成人後の課題などの共有・検討や地域別での連携の成功事例の共有、引継ぎの情報の整理などを実施した。来年度は「特別支援教育コーディネーターと園の主任をバックアップする体制づくり」をテーマに検討を進める。4月にコーディネーターと主任の合同連絡会を計画している。

（補足等）

委員：縦と横のつながりを強化する取り組みを進めてきた。各学校の特別支援教育コーディネーターの力量には差があっても、支え合うシステムの構築によりスムーズで効果的な連携をとることができるのではないかと感じている。2年間実施してきた成果と課題を踏まえ、方向性が見えてきたことは進歩。発達支援センターのニーズは今後も高まると思う。できるだけ多くの支援を必要としている人に関わってもらえる組織として来年度以降も力を借りたい。

②南予地方局より

愛媛県では発達障がい児者支援の地域ネットワーク会議を開催している。11月には宇和島圏域の支援体制構築をテーマに、3月には東中南予合同での支援者研修会を兼ねたネットワーク会議を実施した。関係機関同士の連携体制の重要性が強調されており、文部科学省も教育と福祉の連携推進に力を入れていることが周知された。

南予では支援体制の点検にQ-SACCSを活用し、強みと課題を確認しながら課題解決に向けて取り組んでいる。グループワークを通じて関係機関との顔の見える関係性の構築や連携体制の構築の一助となればと思っている。福祉だけでなく、教育分野や多くの支援者の方に参加していただけるよう、広く周知していただきたい。

4 その他

・次年度は7月頃に開催予定。

5 閉会